

おし沼切り通しにおける地層剥離標本収集

— 川崎では初の本格的な地層剥離 —

川崎市多摩区東生田三丁目の通称「おし沼切り通しの露頭」は、羽鳥、寿円(1958)によって、多摩ロームおよびおし沼砂礫層の模式地とされた地点である。

以後、本露頭は多くの研究者、学生、地学愛好者に知られる所となった。本露頭は土橋ローム層（ウワバミ層準）から多摩Ⅱローム層最下部までが連続して観察できる貴重な露頭であることから、本露頭を訪れた研究者、学生、生徒の数は相当なものと考えられる。

しかし、関東において屈指の好露頭といわれた本露頭も近年は崖堆によって覆われ、訪れた研究者、学生などを失望させるようになってきた。

このような現状にあって、本露頭を含む切り通し周辺が民間の宅地造成工事によって、改変されることとなった。この工事により本露頭は失われることが明らかとなったため、青少年科学館では教育委員会と協議の上、本露頭の記録保存に努めることにした。保存内容は、1. 地層剥離 2. 写真撮影 3. 分析試料収集とした。

1については、実績のある考古造形研究所に委託し、2については、やはり実績のある写真家小池汪にお願いし、全体の監修を本露頭の命名者である共愛女子短大教授羽鳥謙三氏にお願いした。

工事関係者 — 佐藤工業株式会社 — の協力も得られ、1991年1月上旬より上記収集作業に入った。但し、模式露頭そのものは、工事作業の安全上、早期に除去されることとなったが、替わって、模式露頭東側が新たに掘削され、模式露頭とほぼ同様の層序が確認されたので、この工事露頭で収集作業を行う事とした。

地層剥離に先立って、大学関係者、研究者、教員、自然調査ボランティアなどによる巡検がおこなわれた。また、監修者立会いのもとで、写真撮影、層序確認、サンプリング（10センチ間隔計約200個）がおこなわれ、工事露頭では、模式露頭で検出されていなかった第2ゴマ塩軽石層が検出されるとともに、第1ゴマ塩軽石層が不整合に切られていることが確認された。ま

た、明治大学土壌学研究室による独自の調査、試料収集も行われた。

地層剥離作業は、3m幅（土橋ローム、多摩ローム、おし沼砂礫層計約21m）で行うことにした。このような大規模なしかも連続した露頭での本格的な地層剥離は川崎では初めてであるとともに他にあまり例をみないものである。

1991年1月上旬に土橋ロームより多摩Ⅱローム最下部までを4面に分けて行った。工事の進展を待って、3月におし沼砂礫層部分を行う。（1月現在）

地層剥離標本収集の意義と今後の課題

永遠に失われてしまう模式露頭をほぼ完全な形で地層剥離出来たことは、同時に10センチ間隔のサンプリングも行われていることと合わせて、教育的にもまた今後の研究を進める上でも、その意義は極めておおいといえる。都市化の進展に伴い、我々に何よりも自然観の変革をもたらしてくれる露頭が失われていく現在、予算的な問題はあるにしても、地層剥離による資料収集について積極的に考えていくべきであろう。すくなくとも、露頭全体は無理にしても、火砕質鍵層だけでも剥離標本の形で保存すべきと考える。また、ローム中の軽石、スコリア、岩片、ラピリなどの粒径分析やクロスラミナの正確な測定など、剥離標本そのものを用いた新たな調査も可能である。

今後は採集した試料の分析をすすめ、また展示活動などの教育普及活動への本剥離標本の活用を積極的に図りたい。

最後になって恐縮ではあるが、佐藤工業向ヶ丘作業所の方々を始め、建設関係者の方々には色々とご配慮頂いた。ここに感謝致します。また、付近に御在住の方々には終始暖かい目で見まもっていただいた。心より感謝致します。

文責 増淵和夫